序

平城宮跡の発掘調査ではじめて木簡が検出されてよりすでに九年の歳月を経た。この間に出土した木簡はすでに二万点に達している。現在までの発掘は宮全域の一五パーセントに過ぎないから、予想される木簡の数がいかに厖大なものであるかが推測される。

平城宮の発掘はすでに十年を越え、その間に幾多の学術的成果を得たが、その最大のものの一つに木簡の発見があるといってよい。平城宮跡発掘調査そのものにとって、また日本古代史研究史料としての意義については、ここに事新しく云々する必要はないが、我が国書道史上の価値もまた高く、今後その方面での研究が期待される。

しかし、この木簡はそのままでは後世に永く保存することは困難である。従って

その保存は最緊急の問題として、当研究所において保存科学的研究にとりくみ、着々成果をあげているが、なお必ずしも完全な方法を開発しえたとはいいえない。即ち木簡の完全な記録を一日も早く世に出すことがこの保存の一方途として考えられた。そこで平城宮跡発掘調査部史料調査室は、当研究所各研究員の支援のもとにこの史料の公刊事業にとりくんだが、今回公刊した史料のみでも中板の写真原板二千枚におよび、その原板の整理・編集、釈文および解説原稿の作製から校正にいたるまでの作業は、その間に次々に出土する新しい木簡の整理に追われながら進めなければならなかった。そうした努力によりここに第一冊目を公刊することが可能になったが、これを契機として、なるべく速かに第二冊以降の刊行を進めて行く計画である。

なお本書の作製に当っては平城宮跡発掘調査指導委員会の諸先生を始め多くの方々より有益な御指導を賜ったが、とくに赤松俊秀、岸俊男、鈴木一男、直木孝次郎、森鹿三の諸先生には何かとお世話になり多くの御教示を得た。英文要約の翻訳はマ

ネー・L・ヒックマン氏に作成していただいた。また本書の出版に当っては真陽社の中村友吉氏以下多くの方々の献身的な御協力を願った。ここに記して深甚の謝意を表するとともに、諸賢の今後の御協力を心からお願いする次第である。

昭和四四年一一月

奈良国立文化財研究所長
松　下　隆　章